

北野廃寺・北野遺跡の地鎮遺構 —江戸時代後期の新例—

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財) 京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真 1 地鎮に用いられた土師器の皿と石粒

はじめに 北野廃寺・北野遺跡は京都盆地の北西部に位置する遺跡です。北野廃寺といえば、山城最古の寺院跡として知られていますが、今回紹介するのは、この寺院が建立されてから千年以上経った江戸時代後期の家屋敷の地鎮に関連する資料です。

地鎮遺構は 2023 年に実施した発掘調査の調査区中央から北側に寄った位置で見つかりました (図 2)。直径約 0.3m、深さ約 0.2m の穴底に土師器の皿 2 枚が口を合わせて重ねられていました (写真 2-1)。その周囲は粒径数 mm の石英を主とする白い石粒を混ぜた土

で埋められていました (写真 2-2)。上蓋を外すと、下皿の中央に白い石粒が盛られていました (写真 2-3)。

土師器皿に記された文字 双方の土師器皿の内面中央には、写真 1 のように「中央黄帝龍王安鎮守護」と縦方向に一行で記され、さらに、口縁部周縁には右回りで「三元三行三妙加持」の文字が三度繰り返して記されていました。これらの文字のうち「中央黄帝」は四神の長である黄帝、「龍王」は水神の八大龍王、「安鎮」は安鎮法による家屋や屋敷地を鎮めるための修法、「三元三行三妙加持」は神道の五形祓に用いられる



図 1 土師器皿実測図 (1 : 3)

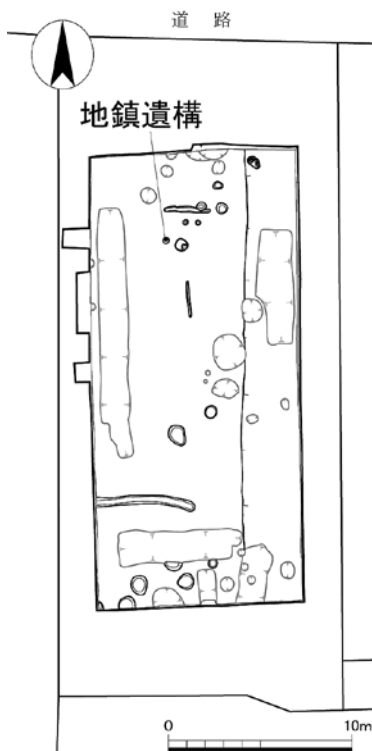


図2 地鎮遺構の位置 (1 : 400)

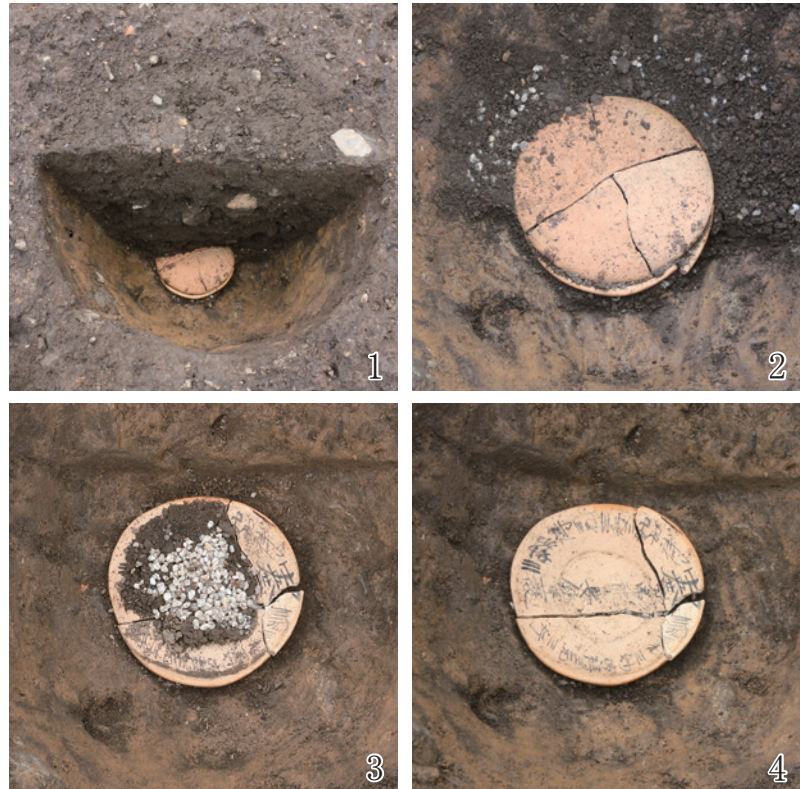


写真2 地鎮遺構の調査過程

のりと祝詞の用語です。以上からこの場所で神道の修法に則って地鎮祭が行なわれたことが判明しました。

周辺の探索 建物を構築する際、その土地を鎮め、工事の無事を願うのが地鎮祭です。『神道大辞典』第2巻によると、伊勢神宮の式年遷宮に伴い大正13年(1924)に行なわれた地鎮祭では中心に祭壇を設け、その四方に東青・西白・南赤・北黒の結界を設置したとされています。これを調査現場にあてはめ「中央黄」と記された地鎮遺構を中心とみて、各方位を注意深く精査しましたが痕跡を確認することはできませんでした。

さらに、鎮物として埋納するとされる金属製人形・鏡・剣・鉾・刀子なども探しましたが見つかりませんでした。一方で、五色の幣・榊枝・大麻・米といった腐食しやすい有機質の物品も納められると史料に記されるため、穴の埋土や、土師器皿の中身

を丁寧に水洗いしたところ、大麦の種実をみつけることができました。このため、大麦以外の鎮物はのちの時代に失われてしまったか、あるいは、皿内と埋土に含まれていた白い石粒が、鎮物の代替品として納められた可能性もあります。

史・資料にみる地鎮祭 奈良時代の『正倉院文書』の中には、法華寺阿弥陀浄土院造営に際し、地鎮祭が行なわれたとあります。

発掘調査の例では、飛鳥寺塔心礎周辺の埋納品がこのさきがけとみられます。平安時代では平安宮内裏承明門跡で検出された輪宝などを納めた地鎮遺構、江戸時代では和歌山城第34次調査で検出された紀州徳川家重臣渡辺家屋敷地の仏教に基づいて石球を埋置した例、さらに、本年3月に京都市有形文化財に指定された「公家町遺跡(柳原家)出土賢瓶及び納入品」などがよく知

られています。これらのうち、公家町の例では、金属製賢瓶の中に象牙玉・水晶・アコヤガイの真珠・金箔を畳み込んだ楮を素材とする和紙包のほか、胡麻・麦・小豆といった穀類、香木とおぼしき木片が納められていました。

過去から現在 令和の時代となった現在ではほとんどみかけませんが、昭和から平成にかけての頃までは個人の住宅を新築する際にも、齋竹とした葉の付いた青竹を四隅に配し、そこに御幣と注連縄を渡した齋場を設けた地鎮祭が各所で行なわれていました。

時代や内容の違いこそあれ、天災や人災からまぬがれ、家屋敷を護ろうと神仏に願うのは昔も今も変わらぬ気持ちです。今回の調査例は、これを垣間みることのできる具体的な事例として貴重なものとなりました。(三好孝一)